

『私の原爆体験記』

森 重昭（もり・しげあき）

私の名前は森重昭（もり・しげあき）と申します。現在 86 歳。被爆者です。77 年前、爆心地より 2.5 キロ離れた己斐町の橋の上で被爆しました。隣を一緒に歩いていた 2 人の友人の陰になり、火傷もせず怪我もしませんでした。しかし猛烈な爆風に見舞われ、私だけが川の中にふっ飛ばされたのです。

幸いなことに気絶をしませんでした。そのため川の中で溺れる事もなくまだ生きています。私は原爆のキノコ雲の中にいたのです。目の前は真っ暗でした。10 センチ前に指を立て数えようとしたのですが、手の指がはっきりと見えない程キノコ雲の中は暗かったのです。一時間位川の中にいたのですが、目の前が段々と明るくなったので岸を這い上りました。すると一人の人が近づいてきました。よく見ると 20 歳台の女の人です。血だらけです。胸が裂けており、中から飛び出た内臓を両手に抱えて、「病院はどこですか」、と尋ねてきました。その時です。上空で B29 の爆音がしました。

私をふっ飛ばしたあの B29 が戻ってきたと思いました。また、やられる。顔が引きつりました。目の前にいる大怪我をしている女性のことなど、眼中に無くなり、必死で逃げました。道の中に沢山の人が横たわっておりました。まだ生きておりました。付近の倒壊した建物の下から「助けてくれー」という声があちこちから聞こえてきました。それらの声は無視して、道に横たわる人の顔や胴体を踏みながら、逃げました。泣きながら逃げました。命のことを考えたのは、この時です。死にたくない、というのが本音です。逃げる人は私一人ではありません。何人もいました。全員無言です。幽霊のように両手を前に下げていたかどうか、覚えていません。後から聞いたことですが、両手を心臓より上にあげると楽になったそうです。それより、たった一発の爆弾で広島市がふっ飛んだなんて、誰が考えましようか。この証言をする時にかならず皆さんは広島市は見わたすかぎり、瓦礫の山になっていた。その向こうに似島（にのしま）が見えた、といます。

後日、新聞やラジオで広島に落とされた爆弾はたったの一発だったと知らされても、それが本当かどうか信じられませんでした。

もう一つ。新型爆弾がパラシュートで投下されたというニュースです。新聞の一面にでたので覚えている人が沢山います。原爆は重すぎてパラシュートで投下はできません。投下されたのはラジオゾンデの方です。亀山に落ちてきました。原爆資料館にその本物が最近まで展示されていました。ニュースは間違いでした。

もう一つ興味深い話があります。最初、爆心地がどこかわかりませんでした。現在わかっている爆心地の方から郊外に逃げた人がいる一方、郊外から爆心地に向かって入ってきた人も大勢いたのです。広島市内はてんやわんやでした。茫然としている人が大部分でし

た。何が起こったのか、わかりませんでした。死神は後から突然切りつけると言いますが、原爆は正に死神そのものでした。いきなりやられたからそう思ったのです。原爆は誰も経験したことのない爆弾でした。昭和20年秋頃から国民は少しずつですが、原爆について情報を知ることができるようになりました。ソフトボール大のウラニウムに中性子を衝突させて爆発させる、連鎖反応が次々と起きる爆弾等々についてです。 $E=mc^2$ が、広島市の平和公園の入り口の慰霊碑にかいてあります。アインシュタインの特殊相対性原理です。世界中で一番有名な公式です。広島と長崎はこの公式によって、広島14万人、長崎7万人の人が命を亡くしました。令和4年になると、原爆で死んだ人の数が随分ふえています。広島33万人、長崎19万人です。両都市の死者の合計は52万人になりました。広島市の原爆の写真をとったB29は呉の向こうの広（ヒロ）で撮影されました。そのB29の名前はネセッサリー・イーブル（必要悪）といましたが、やられた私には、飛行機の名前はアブソリュート・イーブル（絶対悪）だといいたいのです。写真をとった人の名前は、マッコード。本人が32年前、広島に来て名乗ったので知りました。島外科の院長にそういいました。原爆がいかに凄い爆弾か、話しましょう。 $E=mc^2$ のEはエネルギー、mは質量、cは光の速度です。ほんの少しの物質の中にももの凄いエネルギーが秘められていたのを爆弾として取り出し爆発させた結果、広島は壊滅し、沢山の人々を殺戮したのです。

私は陸軍の済美国民学校に入学しました。市内の基町にあった大きな学校です。今は市営駐車場になっています。国は全国の国民学校（今の小学校）に呼びかけて、次世代の戦力になる学童が都会で爆弾によって命を失わないために、集団疎開をするよう命じました。対象になるのは国民学校の三年生から六年生までです。私は三年生なので該当者でしたが、私をかわいがってくれた祖母が、爆弾が落ちて死ぬのなら、家族全員と一緒に死のうと言いだした為、私は集団疎開に行きませんでした。被爆前、己斐国民学校に転校したので助かりました。

あのまま清美に残っていたら、確実に死んだはずです。清美の隣にあったのが、中国憲兵隊司令部です。米兵が収容されていました。八月五日、被爆の一日前にこの場所を訪れた人がいました。中村明夫さんという、当時広島一中の二年生です。お父さんは中村重雄中佐という中国憲兵隊では捕虜を取り扱う責任者でした。中村明夫さんは前日（8月5日）、中国憲兵隊を訪れ、お父さんに頼んで捕虜を見せてもらいました。アトキンソン・ライアン・ポーターという捕虜が独房の中にいたことが、わかっています。中国憲兵隊には7人の捕虜がいました。その中でアトキンソンはまだ生きていたので、相生橋に連れていかれ、8月8日に相生橋の東詰で命を亡くしました。

私は第二次集団疎開に三次に行き被爆を免れた校長の済美国民学校の被爆後に書かれた記念誌を見て、一人の米兵が済美の焼け跡で死亡していることを知りました。その時、私は思いました。死んだ米兵も郷里に親兄弟がいれば、きっと彼等の死んだ情報を知りた

がっているに違いないと。米兵を憎い敵と考えず一人の人間として考え、家族に知りた
ことを教えようと。調査の対象となる米国人は当時約二億人。すさまじい数字が目の前に
立ちはだかりました。私の負けん気が勝つか米国の数字が勝つか、勝負が始まりました。
私には米国の地図と電話帳だけが頼りです。

電話でそれらしい人を探しました。アメリカの 50 州全部です。本人の姓は分かっていた
から、名前を調べるのです。国際電々。今の KDDI の前身からです。一通三千五百円
です。五百円プラスすれば通訳もしてくれました。英語が不得意な私にはこれは有り難
かつた。目指す相手が見つかってからもそれからが大変でした。名前と写真を登録する
というが、申請書は日本語しかありません。英語が現在ありますが、あれは広島、長
崎共私が作らせたものです。名前と住所などは私でも英訳できます。しかし、こみ
いった内容になるともうお手上げです。遺族を探して済むものではありません。最
後は友人の佐藤博士に頼んで全て英訳しました。登録といえば、私は一つ良い事
をしています。それは個人情報に被爆時の情報を調べて英訳してもらい、それら
をカードの中にのせてもらっていることです。

被爆した米兵は一人一人が悲劇の主人公でした。戦争が終り、米兵の帰還が始まり
ました。遺族は毎日毎日愛する夫や息子の帰りを待っていました。でもいつになっ
ても誰も帰ってきません。軍や政府に問い合わせてもいつものように、広島上空
で行方不明と紋切り型の返事しかありません。ついに手紙が軍から届きました。
行方不明ではなく、死亡通知です。それを見て、遺族は抱き合って泣いた
そうです。

一部の遺族には、原爆で死んだとはっきり書いた手紙が届いていました。これで
アメリカ人も原爆で死んだことがはっきりしたのです。私が手紙のやり取りをした
遺族の誰も原爆を投下したアメリカ政府を非難した人はいませんでした。それど
ころか、慰霊祭で私が被爆死した米兵は全員、英雄だと称えたら全員が立ち上
がって拍手してくれた程です。

申請書を出してくれた人の中に一人ですが危篤の人がいました。隣の人に頼
んで耳許で申請書に承諾をするよう説得してもらい OK を貰ったこともあります。
遺族を調べても調べてもわからないので、絶望したことがありました。その時
ひらめいたのが、大統領に直接手紙を出す、でした。手紙を出したらなんと本
当に手紙が届き、返事がきました。アメリカ政府の高官が大統領に代わって
遺族を探し出してくれたのです。遺族は姪でした。姪はオハイオ州から米
国の岩国航空隊に電話をして、私が原爆被害対策部調査課に申請書を代理で
出すことが正しいことかどうかわかぬかと問い合わせたそうです。姪とす
れば、突然見知らぬ日本人から手紙を貰い、どうしたらよいかとまどったこと
でしょう。だから電話をしたのです。

この話には続きがあります。アメリカの高官が遺族を探し出してくれたのですが、
住所が変わっていてわかりません。アメリカ人はしょっちゅう住所を変えること
をこの時初めて知りました。結局、最終的には毎日新聞が遺族を探し出して
くれました。

この姪は死ぬる前に、私が遠いアメリカでよくもよくも調べに調べて自分たちを探し出してくれたと感謝していたと知り、私は涙がこぼれてとまりませんでした。米兵の遺族とは申請書を出した後も手紙のやりとりをしています。民間の外交官だと日米とも関係者は誉めてくれます。

その中でも米国のトップ、大統領が、私がしたことを認めて下さったのですから、こんなに嬉しいことはございません。忘れもしない 2016 年 5 月 27 日・平和公園の慰霊碑の前で、それも世界中が注目している中で、大統領はあの長い手を私の背中に差し伸べて、自分の方に引き寄せてくださいました。私が涙ぐんでいたのを見て、咄嗟（とっさ）になされた行動でした。大統領は何もおっしゃいません。私も何も言いません。でも心はお互いに通じ合ったと思います。大統領のお陰で私は有名人になりました。

あれから七年が経過しました。日本の各地から、今でも講演依頼があります。その都度、私は平和の大切さを話します。本当にそう思っているからです。

平和の大切さは、平和首長会議の数を見ればわかります。最初、広島荒木武市長が長崎市長に呼びかけて、この会議を始めた時は二市だけでした。広島と長崎の二つの都市だけでした。今は首長会議と言いますが、昔は市長会議でした。参加する都市の数は二から八千を超えたのです。世界中の人がいかに平和を希求しているかが、これでわかります。

長崎には原爆で死んだ連合軍捕虜は八人いました。私が登録するまで、誰一人、名前も遺影も登録されていませんでした。捕虜が収容されていた第十四分所跡に大きな説明文が看板になって設置されていました。説明文は日本語と英語です。縦が 1.5 メートル、横が 2.5 メートル位ありましたから、かなり大きなものです。三菱重工が土地を所有しているとのことでした。それを読んだ私はびっくりしました。ここで捕虜が 60 人から 80 人原爆で死んだと書いてあったからです。冗談ではない。人数が多すぎるのです。海外から遺族が来て、この看板を見たらどう思うでしょうか。看板を製作した所に電話をして訂正するよう申し入れました。相手は不機嫌でした。しかし、文句を言ったのは私一人ではなかったのです。多数あったようです。正しい被爆死した人数に書き改められましたが、看板自体は小さくなりました。それも現在は無くなり、慰霊碑は原爆資料館の入口付近に移され、新しい慰霊碑がまた除幕されるようです。捕虜がいた場所ではない所にです。

広島と長崎には広島原爆戦災誌と長崎原爆戦災誌という公文書があります。どちらとも戦後二十数年たってから、書かれました。元々アンケートで両市の被爆状況を調べたものですが、被爆後時間がたっており、責任者が異動したりしたため間違いが散見されるようになりました。結局、改訂版が出版されることになったのですが、費用が広島にはないという理由で出版されず、長崎の方はかろうじて出版されました。

現在、長崎で被爆した八人のうち六人の名前と遺影の登録に成功しました。あと二人で終了します。

フルーン・アーリーとクウマンズ・ウィルム・ホートリーブがその人たちです。ヨセフ・マクシミリヤーン・ベルナーデスの登録には往生しました。オランダ人は全員、英語がわかると思ったのが間違いでした。オランダ語で説得してもらうため、オランダ語をわかる人を探し出すのが一苦勞でした。やっと家内が見つけてくれました。その人はアムステルダム・コンサートヘボウのバイオリニストです。それも日本人です。この人が、休みに日本に帰る時にお願いするように働きかけました。やっと成功しました。被爆死したオランダ人を見つけ、遺族を探し出してから二十年目です。言葉では表現できない程嬉しかったことを思い出します。

私が無償で調査しているのを何のためにという人がいます。私は言いたい。家族が戦争に行行って行方不明のなっても平気ですかと。どの遺族も必死になって探していました。軍や政府に問い合わせしていました。ラジオで「尋ね人」とした人もいます。死亡の正式通知が届いても、きっと生きて帰ると信じて探し続ける人も少数ですが、いました。

これが戦争なのです。戦争の実態なのです。だから戦争はやってはいけないのです。英国の大使が私にくれた手紙を披露します。

2005年7月6日付 森 重昭殿

ロナルド・フランシス・ショー伍長を長崎原爆資料館に登録して下さいまして、ありがとうございました。今年は広島・長崎の原爆投下とショー伍長の死から60周年であり、この記念すべき年に登録されたことは非常に歓迎すべきことです。

貴殿が原爆犠牲者の登録に多大なる努力を払われてきたことを存じております。

その素晴らしい探求のご発展をお祈りしております。

一心より—グレアム・フライ 駐日英国大使

私はこの原爆体験記を自分の体験に基づいて書きました。一部分は他人に教わったり、本や論文、テレビから知識を得て内容を膨らませました。裏付けはもちろん全部とっています。

五月になって、広島にG7の首脳が集まり、様々なテーマで討論が行われます。真剣な討議が期待されます。会議は日本の首相が議長になり、テーマの中に平和が必ず入っているはずで、それが一番大事だからです。